

## 三報告へのコメント

小 倉 欣 一

本日のシンポジウムの目的は、ヨーロッパからシトー派修道会、ベギン会、日本から神社、仏教諸派の寺院をとりあげ、中世社会における宗教集団（以下では教団と略称）と都市生活・商工業との関係、その歴史的意味を比較によって解明しようとするものです。

最初にシュルツさんは、11世紀末にフランス東部の荒野に創設され、ヨーロッパ各地に広がったシトー派修道会が、「祈りと労働」の厳格な戒律を守り、清貧で禁欲的な、そして自給自足の生活をめざしながら、12、13世紀になると生産物の市場での販売を求め、都市と上層市民との結びつきを深め、帝国政策にも関与し、世俗の助修士を通じて製塩や塩交易、鉱山業を営んだ事情を豊富な例によって示されました。そのなかで特に、カール・フォン・デア・ザルツガッセという、ケルン市民で騎士の身分をもつ人間について非常に印象的なお話をなさったのですが、それだけにわたくしは、他方で助修士というものの存在に興味をひかれました。シュルツさんは、これまでミニステリアーレン（家人）や職人の研究をなさり、ミニステリアーレンから騎士、職人から親方へという「下層民の上昇運動・社会的流動化（モビリティート）」という現象を明らかにしてこられた方ですので、この視点から助修士も伝えられないかどうか、うかがいたいです。

第二に上條さんは、中世中期以後、ベギン会という半聖半俗の女性集団が北西ヨーロッパの諸都市に出現した事情、構成員の出自と活動、既存のシトー派やプレモンテ修道会との相違や修道会数の推移などをケルンを中心に考察なさいました。それに加えて、やはり同時代の都市のなかに出現した托鉢修道会との比較をもう少ししていただけると、当時の都市社会の状況がよりよくわかるのではないのでしょうか。ベギン会に入るには、持参金などが要件とならず、それゆえ市民の上層・中層のみならず、下層の子女も多数が入会し、みんなで織物業などの生業を習得し、協業による自立をめざしました。女性の自立は、現在もまさにアクチュアルな問題で、ご報告は女性史の観点からも注目されます。近年アメリカでは、History はこれまで His Story であったので、His and Her Story でなければ本当の History にならない、と主張されているようです。したがって、このたびベギン会について討論するのは、大きな意義があるといえましょう。

最後の義江さんは、両報告を意識しつつ、中世の全般期にわたり様々な神社と寺院について、都市の建設と諸権力、経済活動、それらの勢力の倫理・論理との関係、歴史的背景など

について、日本史の立場から比較のために斬新で意欲的な問題の設定と史料の説明をしてくださいました。そのなかで女性史に関しては、遊女に言及なさいましたが、尼寺、たとえば「女人高野」といわれる室生寺はどうであったのか、ベギン会と比べられるのかについて補っていただければ、幸いです。

以上のように、三つの報告それぞれについて短い解題と一二の質問をいたしましたが、続いて討論のために問題群を整理し、比較しうる事項を示してみます。報告のなされた中世に則して第一、二、三の問題、それからはみだして中世から近世・近代を展望しつつ第四の問題を提出し、わたくしのコメントを終えたいと思います。

第一問：キリスト教・神道・仏教の教義の特徴、教団の創設事情、理念・戒律とその変化。

第二問：教団の組織・運営、入団の条件、構成員とその社会的出自。

第三問：教団の活動・経営と都市・商工業との関係、その他。

第四問：中世から近世・近代への展望として、

- 1) 宗教改革・対抗宗教改革と教団の存否、シトー派修道会の戒律と合理的な経営の意義（ウェーバー・テーゼ「資本主義の精神」と「社会的規律化」（エストライヒ）をめぐる論争にも関連して）。ベギン会の貧困市民層に対する病人の介護・死者の世話・埋葬の手伝などは、都市当局の一般救貧金庫の設立にも寄与 [例えば M. Spies, *Beginngemeinschaften in Frankfurt am Main, Dortmund 1998* を参照]。日本の神社・寺院の場合はどうなのか。
- 2) キリスト教と神道・仏教の出会い：イエズス会宣教師ルイス・フロイス (1532-97) の著作『ヨーロッパ文化と日本文化』（岡田章雄訳注、岩波文庫）の叙述の検討：「われわれの間では、人は罪の償いをして、救霊を得るために修道会に入る。坊主らは、逸楽と休養の中に暮らし、労苦から逃れるために教団に入る。」「われわれの間ではデウスに対して清貧の誓いをたて、世俗の富貴から遠ざかる。坊主らは檀那を食物にし、あらゆる手段を講じて自ら富み栄えることを計る。」「われわれの間では修道士は常に平和を念願し、戦争はかれらにとっては甚大な苦痛である。根来の坊主らは戦争を仕事とし、戦闘に赴くために領主らに雇われる。」「われわれの修道士が金箔塗りの扇を手にして歩いたならば、狂気の沙汰だと思われるであろう。坊主らは説教をする時や外出をする時に、威厳をつけるために、必ず手に金箔塗りの扇を携行する。」「われわれは聖像に諸種の色彩を用いる。かれらは自分達の聖像を上から下まで金で塗る。」「われわれは唯一万能のデウスに対してすべて現世および来世の幸福を希う。日本人は神に現世の幸福を求め、仏にはただ救霊のことだけを希う。」